

# 「地域」を場とする生活者教育 ～地域活性化時代における大学の役割として～

須賀 由紀子

現代生活学科 生活文化研究室

Education for Autonomous Citizen on the Field of “Local Area”  
～ As a Role of University in the Age for Local Society Progresses ～

Yukiko SUGA

*Department of Studies on Lifestyle Management, Jissen Women's University*

It is the most important issue about the social progress in the local area today. For this issue, the author considered the measures of human resource development used to invigorate local communities from the viewpoints of education for nurturing the autonomous citizen. That became clear in this research that the *Gimotogaku* — which was a way of research to find out the meanings of cultural landscape in local areas — was useful in making young people conscious about the vitalization of local communities. Because *Gimotogaku* included all the skills such as the attitude for global environmental problems, finding a purpose in life, planning skills for making community design and SNS networking skills. Also, the author discovered that a knowledge of folk customs as well as the community creation in the society during the period of high economic growth in Japan, deepens the effectiveness of *Gimotogaku*. The conclusion was that the education for *Gimotogaku* was useful in the field located a university, as the education of the autonomous citizen. It was beneficial for human resource who took over the responsibility for the social progress.

Key words : Social Progress (地域活性化), *Gimotogaku* (地元学), Folk Custom (民俗学), Endogenous Development (内発的発展論), Autonomous Citizen (生活者)

## 1. はじめに

人口減少社会の到来が現実のものとなり、地域活性化が時代のテーマとなっている。その方策の一つとして、ご当地キャラクターの活用、地域自慢の食文化や観光資源を活かしたイベントなどが各地で花盛りである。もちろん、そうしたイベントは、地域の賑わいにつながることであろう。しかしながら、それは一部の人による、一過性の催しで終わることも多いのではないだろうか。

翻って、かつての祭りは、人々の暮らしに根付いた集落全体のものであり、年ごとに繰り返される祭りを無事に執り行うことは、村の平穏な暮らしの継続に関わるものであった。日常性のケガレに対して、祭り(ハレ)の日は特別なエネルギー(ケ)をもたらし、日常生活をスムーズに循環させる文化装置であった

(ハレ-ケ-ケガレ)。この伝統の祭りの存在意義に照らしてみると、今日のイベント的な祭りは、地域全体の活力に、どの程度結びついているのだろうか。

このような問いを置くと、イベントを新しく創り出すことも大事だが、本質的には、そこに住む人々の、地域(=日常生活が日々積み重ねられていく場所)をいつくしむ暮らしの充実が、地域活性化に必要ではないだろうか。日常の暮らしに価値を感じることで、結果的に地域を愛することにつながり、その土地ならではの暮らしや風景が守られ、継承されていく。地域の暮らしを愛する人によって、地域の本質的魅力が発信され、ソトにも開かれ、新たな人のつながりを生む。その意味では、足元の「地域の暮らしの価値」に目を向け、それを活かそうとする「生活者教育」こそ、地域活性化の根本的な課題ではないだろうか。しかしな

がら、そのような教育の場は、今どこにあるのだろう。「女性が輝く社会」がめざすのも、社会で活躍する女性像であり、暮らしを紡ぐ生活者としての輝きには、目が向くことはない。

本稿は、このような問題意識を背景として、地域の活性化に寄与する人材育成のあり方を、生活者教育という観点から検討し、大学と地域連携について考察してみようという試みである。

まず、先行研究をもとに、「地域活性」の捉え方を定義する。その上で、「地域の価値」を捉える方法としての「地元学」に着目し、生活者教育という観点から、その現代的な価値を考える。次に、民俗学の知見と戦後のコミュニティ形成からの検討を加えて、地域のもつ生活者教育としての可能性を考察する。以上を踏まえ、学生を「地域で育てる」ことの意義および地域活性化時代における大学の役割について論考する。

## 2. 「地域活性」の捉え方～言葉の定義

地域活性化は、国家戦略の「地方創生」と相まって、現代の重要なテーマの一つである。しかしながら、事例研究は数多くあるものの、それら事例に通底する理論の研究は進んでいるとはいえない。小林ら(2014)は、この問題に対して、これまでの地域活性化の事例研究が対象としてきた内容を振り返り、「地域活性」とは何かを抽出する試みをしている。

それによると、「経済発展から遅れ、過疎化が課題となる中で、地域独自の文化や暮らしに価値を置こうとする農村づくり、村づくり」の事象(たとえば、大分県からはじまり全国に広がった一村一品運動や独自の生活文化を守って地域づくりを行った大分県湯布院町の地産地消のまちづくりなど)が、「地域活性」という用語が生まれる以前からの活性化事例である。もう一つは、その土地の人々の内発的な動機に基づく発展に注目する玉野井芳郎らの「地域主義」の考え方の流れがある。また、同研究では、川喜田二郎の1980年の文献において「地域の活性化の意味」が記述されていることに着目し、これが「地域活性」という用語の初出ではないかとする。そこでは、地域の活性化における「文化(技術、産業、厚生、社会組織、価値観、世界観)の活性化」の重要性が強調されていることを指摘している。

さらに、「地域活性」の定義づけを行ったその他の

先行研究の中から「地域の資源を活用し、生き生きとした創造的な生活を営んでいる状態、またはそうした目標に向かって努力している状態」「人々の生活が多様性を保全したまま持続可能となること」といった視点があることを取り上げ、「活用」「連携」を地域活性の要件とする。

この分析に基づく、雇用、産業の創出は地域の活性化に必要なではあるが、それだけでは十分とはいえない。大事なのは、地域独自の文化を活かして創造的な暮らしを創り出す状況にあるかどうかである。つまり、地域の中にある<地域資源>に主体的に働きかけ、つながりをつけていく営みに、地域の活性化も生まれてくる。それは、これからの「生活者」としての生き方の探求でもある<sup>1)</sup>。地域の文化や暮らしの価値を知り、その価値と自分をつなぎ、それを公共的価値へと結び付けていく。このような意志は、「生活者」としての生き方にとって大事であり、そうした意識を持つ個人が増えるところから、地域活性化への道も開かれていくと捉えられる。

以上から、自分の地域にじっくり関わり、地域のよさを暮らしに活かすことが、地域活性化の担い手となる手立てであり、そこに動機づけることが生活者教育となると考えられる。

そのためには、まずは「地域をよく知る」ことが大切となる。その方法論の一つに「地元学」がある。そこで次に、地元学に着目し、その現代的価値を検討する。

## 3. 「地元学」という方法論、その価値と課題

### 3-1. 地元学とは

地元学は、地域住民が、地元の良さに気付き、地域づくりに役立てる方法である。1995年に、水俣市職員だった吉本哲郎によって、市民の手で水俣のことを主体的に考えるきっかけづくりとして始められ(吉本2008:4)、その後各地で役立てられている。

「水俣のことはソトの人ばかりが詳しくて、住民自身が自分の土地を知らない。これでは水俣はよくなる」という思いがこの運動のスタートである。市民が、自分たちで「地元」を実際に歩いて、地域の現実を知り、課題を見つけ、そこから考える。そのような意識を持つ市民が一人でも育つことが、本物の地域活性化に結びついていく。この信念のもと、地元をより

よく知るための地元学の方法が確立していった。地元学は、あくまでも行動のためのものであり、地元に役立てる実学である。

現在では、地元学は、地元以外の人と地元の人が一緒になって、その地域を歩き、地域資源を発見し、地域が持っている生活文化の良さに気づき、新たな事業開発や価値創造に結び付けていこうとする方法として定着をしている。特に、「生活をする」ということ自体に対して、普段あまり問題意識を向けることのない、大学生などの若者に適した方法である。まず、歩いて土地の全体を感じる。そして、風景や人との出会いの中で見つけたことを地図の上に描いていく。それをもとに交流しあい、土地の価値や活かし方を発想していくのである<sup>2)</sup>。

### 3-2. 地元学の現代的価値

地元学に関する先行研究をもとにすると、地元学には、その土地の風景や生活を知るという直接的な目的を超えて、以下に示すような現代的価値が指摘できる。それは、暮らしに対する問題意識を育み、現代を生きる知恵や技術（その意味で、「生きる力」といってもよい）が得られるところから、生活者教育としてふさわしい。以下に、このことについて検討する。

第一に、地元学は水俣に端を発しているところから、「水」と「環境」が大切なテーマとなる。「命の根源である水、その水を生む森や川に問題意識が向けられている。太陽・光・天然エネルギー、命の連環が主テーマ」なのである（鈴木2009）。この基本姿勢は、「環境の時代」に相応しいライフスタイルへの意識をもたらす。

今日、「持続可能な地球社会の構築」が課題であるが、そのためには、近代科学と近代社会の基盤となっている自然観をあらためて問い直す必要がある<sup>3)</sup>。食糧だけではなく「清浄な水と空気、心を和ませ、豊かにしてくれる美しい自然の景観も、すべてを『自然の恵み』と捉え、維持し、育むことをしなければ、持続可能な社会は作っていけない」（村澤他2015:27）。意識改革には、人間の生活を取り巻く自然を「文化としての自然」として試みるのが大事である（徳山2015:39）。すなわち、人の手が入ることによって多様な生態系が保持されてきた方法（技法と作法）に対して、問題意識を持つ。それが、自然と人間の関係性のあり

方を踏まえたライフスタイル改革につながる。部分的に自然の片鱗が残るだけの「都会型里山」でも、意識を持てばそれは可能である（同上:41）。

具体的には、自然との節度ある関わりの中で育まれてきた生活文化を発掘し、今に活かす、ということである。地域を歩き、昔の生活文化の作法を、肌感覚として知っている人々、すなわち、生活の中での経験を持つ「生き字引」が生存する間に、それを伝え聞く。その知恵に触れるにつれて、現代の消費的な生き方に対する反省や、暮らしの工夫に関する知恵を得ていく。その意味で、地元学は、「持続可能な地域社会」を肌で感じ、そこから「持続可能な地球社会」の一員への意識を育む一歩なのである。価値観のパラダイム転換を求められる時代において、実際に歩いて、経験したことをもとに自然と生活を見つめ、自らの生き方・暮らし方に対する意識を育てる地元学の営みは、現代の生活者教育に相応しい。

第二に、地元学の営みは、地元の人にとっても、そこに「ヨソモノ」として関わる者（特に若者）にとっても「自信」を与えてくれる。これは、現代における「幸福」や「生きがい」との結びつきにおいて、大切である。

「吉本地元学」の動向に着目してきた小栗有子は、地域の価値発見における、「何者でもなく、何者でもありうる」という若者の存在価値を指摘している（小栗2013）。

現代の都会化・洋式化された生活感覚の中で育ってきた若者は、自分たちの今までの生活体験の中にはない話に興味深く耳を傾け、集落の人が「敬い、守り、伝え、残したい」ことを引き出す。ヨソモノがそこに加わることによって、地元の人が、「当たり前のことのでたいしたことない」と思うようなことに光が当てられる。「日常性のごく普通のこと」に対して、ヨソモノによって価値づけが与えられることによって、地元の人も地域の暮らしを主体的に考えようという意識に変わる。「過去の遺物」と思っている地元の生活に光をあて、その価値を新たな文脈の中に位置づけ直し、再編集して新しい価値づけ（物語）にする。それを通して、地域の自信、主体性が引き出されていくのである。そこに、真の「自治の力」による生活改善意識が生まれる。そこが地元学の活動の本質であると、小栗は指摘をする。

ハンセン病患者と関わる中で、人間の生を日々支えるものは何かを見つめた神谷美恵子は、著書『生きがいについて』の中で、生きがいを構成する要素に、「反響への欲求」があることを指摘している。誰かに、自分の存在を認められたいという思いである。その思いを受けとめる人がいることにより、未来への欲求も満たされていく。それは、一時の「幸福感」とは違う意味で、実存に関わり、生きる支えとなる。ごく普通の、ありきたりな生活や自然が生きがいの対象となる。そういうことに価値を持つ人が地域の中に少しでも増えれば、地域の暮らしも保たれていく。

「反響」を感じ合うこと、そして「未来性」を感じることに、「若い人」が協働で携わることで、若者自身もまた意識改革を経験できる。繰り返し、地元人の生活の思いに耳を傾けることを通して、ヨソモノ自身の主体的な生き方も培われていくのである。そのような場を創りだせるのは、「生活」「伝統」が本来的に持つ力であろう。

こうして、〈主体者〉であること、〈当事者〉として関わることの価値を経験すると、その地域の暮らしを内面から理解しようということになる。そういう理解に立てば、田んぼの手伝いも、棚田復興も、森林の手入れも、「復活それ自体に価値があるのではなく、農作業という共同体験を通じて、表面的にしかわからなかったことが心情としてできるようになる」、そこに価値がある（小栗 2012）。成熟社会の満たされた環境、情報洪水の受動的な環境の中で育つ現代の若者にとって、どのような「価値」を大事にし、どのように「主体」を形成したらよいかの視点を得ることができるのである。その意味で、生活者（主体的に働きかけをしていく存在）になるための、重要な教育の手立てとなりうる。「地域学：究極的には、自己の生き方の問い直しを迫るもの」（井口 2011：30）とも言われる。それは、地元の人とヨソモノの「協働」の営みの中で、双方の立場において生まれる。

第三に、地元学による地域の価値発見・価値創造のプロセスが、今日の価値共創社会に大切なものごとの創出方法に合致するという点である（大住 2015）。地元学では、地元の人とヨソモノが一緒になって、地元の生活や風景を見つめなおす。そして、新たに気づいたことや、面白いと思ったことを、個々が拾い出し、全員で共有する。その中から、新たな「価値」と

思えることを再編集し、表現することを通して、人の輪がひろがる。こうした方法論そのものが、今日のソーシャル・デザインの手法にあたると思われる。主観的に感じたこと集積から集合知を創り出すプロセス、それとともにチームの協働も育まれ、その場が作り出す価値の創造が行われていく。しかも、その提案は、頭の中の想像だけで考えるのではなく、体験・経験に基づくものなので、リアリティがある。従来であれば捨てられていたようなマイナーな考えも拾われる。どのような思いも、基本的には否定されることなく生かされる、そこに、思わぬ創造が生まれる。「型」どおりのものを間違いなく製造するのではなく、生活価値を新しく創出する時代に必要なデザイン思考が、地元学的手法と軌を一にするのである。この点からも、地元学は新たな時代の暮らしを切り開くための力となる。

第四に、「土と風」と「水」の関係性という地元学独自の視点である。

地元学の方法は、「土と風」にたとえられえ。すなわち、〈土の人〉は地元の土着の文化を持っている人のことをさす。一方〈風の人〉は、外部から、たまたまその土地へと入ってきた通りがりの人であるが、ヨソモノだからこそ見える「土」の価値の発見者である。その両者をつなぐところに〈水の人〉がいる。〈水の人〉は、二者の出会いから生まれたものに、いわば「栄養」を与える媒介者である。ヨソモノの〈風の人〉が〈水の人〉となる場合も、〈土の人〉の中から〈水の人〉が生まれる可能性もある。

この〈水の人〉の役割を果たすところに、新しい時代の SNS というメディアの可能性がある。これまでは〈水の人〉は、「水」をやるタイミングを慮らなければならなかった。つまり、「水」が枯渇しないように、あるいは逆にやりすぎないように、タイミングや場や人間関係などを推し量って、相手に配慮することが必要であった。そして、それが時に、「土」と「風」との微妙な関係性を壊してしまうこともあった。しかしながら、今日は、SNS で生きた情報が一挙に世界共有とされるようになり、相手との関係性ではなく、周囲から価値づけがなされる時代を迎えている。〈水の人〉は、その土地の価値を見る目を持ち、その価値を表現して魅力的に発信する表現力、情報発信力を持つことで、新たな外との関係性を生み出す担い手とな

れる。

「土」に活力を与える「水」の、無限の可能性を追求できる新しいメディアの時代である。メディア時代の申し子である若い世代には、その基礎力がある。このように、これからの時代の生活者として、新しいメディアの可能性を切り拓く挑戦の場としても、地元学の営みは現代的である。

以上の4つの点において、現代の暮らしと社会の課題に意識をもち、よりよい暮らしを主体的に築いていこうとする生活者教育と地元学は、密接な関わりを持つことが認められる。実践力、行動力、構想力、コミュニケーション力が求められる現代の大学生の教育としても、そして、生活者教育の手立てとしても、地元学の取り組みは、有効な手立てであるといえよう。

### 3-3. 地元学の課題

以上のように地元学は、その現代的価値が認められる反面、次のような点が危惧される。

地元学は、水俣の人が地域の価値を再発見するための実践的な方法として始められたが、日常の風景を大事にするという姿勢は、民俗学が、土地の生活の風習をつぶさに聞き書きをし、土地の人の「心」を読み込む作業を積み重ねていったことに似ている。

したがって、それは、民俗学と同じ落とし穴に陥る可能性がある。それは、ひたすら「日常の生活」を追うものの、日常性の行進に終わってしまい、そこに意味や価値の高みを見出すことができなくなるという危険性である。この点について、宗教学者・山折哲雄は、ともに「民衆」の学であるところの「民族学」と「民俗学」であるが、「民族学」は「理論」や「仮説」のメニュー構築に一所懸命になり、「民俗学」は「素材」提供に一所懸命になって、『『民俗』という名の膨大な量の退蔵物資の中に埋没してしまった』という指摘をしている(山折2014:16)。民俗学は、ただひたすらに日常性を追いかけて、「コト」や「モノ」を山積させて、土臭さ(民俗)がハイカラ(民族学)に屈し、埃をかぶってしまった。使い古した生活用品をいくらかたくさん蒐集しても、それらに「意味」を持って関わられなければ、単なるガラクタにすぎない。

地元学も同じように、「何でも無いもの」の寄せ集めとなり、「地域を歩いて、地図をつくって終わり」の総合学習となってしまう危険性がある。地元学で発

見される風景は、あくまでも、ごく日常のものに「すぎない」。従って、その風景の中に、自分との関わりが内発的に生まれていくには、そこに「意味」や「物語」を与えていくことが必要であろう。

では、そこにどのような意味ある文脈を読み込んでいくか。山折は、同書において、日本の民俗学の基礎を作った3巨匠：柳田国男・折口信夫・南方熊楠の仕事を挙げ、それぞれの「意味」の読み解き方を、柳田は「自然」の世界に人間の暮らしの意味を捉え、ある種の普遍化を図り、折口はさらに源流・原初の古代人の心に分け入ることでそれを説明し、自然学・博物学を根底にもつ南方は、カオス状態の中に人間の暮らしの意味の根本を求めると特徴があった、と指摘している(山折2014:20)。

このことを手がかりに、地元学が捉える日常の風景の中に、どのような意味を読み込むべきかについて、章を改めて捉え、その生活者教育としての可能性について検討をすすめる。

## 4. 「地元の見方」の深め方

### 4-1. 「内発的發展論」からの知見

目に見える風景に「意味」を読み込むことは、「文化的景観」という言葉でも提唱されている。人の営みと風土により形づくられた文化的景観は、人と自然の共同作品である。すると、日常のごく普通の暮らしの風景が、いかに「ただならぬ普通」であるのか、「それほど地域固有でかけがえのない普通」であるのかを理解される。そこに価値をおき、風景の中に、自然と人間の関わりの中で育まれた宗教観、芸術性、文化的な事象の数々を捉える姿勢を重視するものである(日本建築学会2011:1)。

日常性の営みの「ただならぬ普通」こそ、地域の暮らしを作り、新しい社会を創出していく。そこに着目した社会発展理論が「内発的發展論」である。社会学者・鶴見和子はその考え方を提唱し、それは玉野井芳郎らの地域發展論もつながる<sup>4)</sup>。この内発的發展論の考え方は、はじめに確認をしたように、地域活性化研究の原点に位置づけられるものでもある。

内発的發展論では、「衣食住の基本的生活の安定と人間としての能力が十全に発揮できる状況」が、人類の共通目標であり、その実現に向けて、それぞれの地域社会は、自立的に創造されていくと捉える。土地の

自然・生活文化・歴史的条件に基づきつつ、新しい外来の文化や技術も取り入れながら、生活のあらゆる面において、「異質のものを統合して、新しい価値、考え、行動の様式、人間関係などを創り出す」（鶴見 1996：14）。そのような創造的な構造変化の過程が「内発的」の意味である。

内発的発展が単位ととらえる「地域」は、「その世界の中に『生活者』という地域の担い手の姿、すなわち、日常的責任を持って生活している人たちの顔やかたちやふるまいが浮かび上がる場」「地域における土と水（エコロジー）からなる日常の生態的生活環境の中で、生命を生み出し、生命を育て、生命を守っている」（同上：24）、そういう人間生活の営まれる場である。この「地域」の中に、鶴見が内発的発展の社会変動の着想を得たのは、柳田国男の民俗学であり、さらに地域を超えて、生命の存在様式と同一化し、普遍化する視点を示したのが南方熊楠であった<sup>4)</sup>。

柳田は、普通の民衆の生活の中に「原始、古代、中世、近世の人間関係、習俗、言語、信仰、感性などが、地層のごとく、多かれ少なかれ蓄積」されて、「つらら状」になって近代に持ちこまれ、いくら近代化が進んでも変わらずにあることを民俗誌の中に示した（鶴見 1996：70）。自然に寄り添い、そこに信仰の気持ちを託してきたのが民衆の「変わらぬ心」であり、古代日本以来の心の残像を風景の中にみるとき、日常の風景が、「ただならぬ普通」となり、伝統の生活文化の知恵や自然への敬服の思い、土地への愛着の心も深めることができる。

一方、南方熊楠は、多様なものが多様なままに、異質なものが交わり合い、流動しながら形を変えていく「自然界」の姿に着目した<sup>5)</sup>。自然界では、一つひとつの個体の中に普遍的な命の設計図がありつつ、様々な姿をとる多数の個体が共存し、異質な集団の多様性の中に新しい命が創出されていく。その変動のプロセスに、内発的な社会変動を重ねてみることで、自然と、地域固有の生活文化の多様性の共存こそ、内発的な発展を生み出す源であると理解できる（松居 2015：91）。

柳田・南方の理論を背景におく鶴見の内発的発展論には、目に見える風景の深め方に二つの大切な視点を与える。一つは、地域文化の固有性であり、その固有性は、古代以来の長い歴史につらなる時間的深さがあ

る。もう一つは、目にしている風景の中にある人間と自然の営みや姿の中に、「地球の生命の設計図」を読み取り、生活の風景を、「それぞれの個体の中に生命の全体を持つ」多数の様々な命のエネルギーの総体としてみる、という見方である。すると、命持つものの循環の営みの普遍性に、自分自身の存在を重ねてみるができるという深さが生じる。

「生活者」の視点からすると、これらの「深まり」は、二つの生活者としてのあり方を生む。一つは「固有性」にこそ価値があるのだから、多様な文化の共存を、敬意を持って大切にしようという異文化共生の考え方である。もう一つは、自然の姿の中に生命の鼓動を感じ、自然の内なる声に耳を傾け、一体となる時間を大切に自然との共生の考え方である。この両者の視点をもって、地域の自然や生活の風景を見ることができれば、「単なる風景」が「ただならぬ」意味を持つ風景となる。そうして、目に見える風景と自分の存在に関係性を感じることが、生活者としてのあり方を一歩深める。

#### 4-2. 柳田民俗学と現代の狭間

柳田民俗学が示す「古代以来のつらら状の日本人の暮らし」は、確かに日本人の生活文化の中にある。しかしながら、それだけが「ただならぬ日常性」「ただならぬ普通」ではないであろう。柳田は「必ず、日本人の生活のあるところ、古代へと立ち返っていくことができる」というが、現実のライフスタイルから、古えの生活の名残である農的暮らしがすっかり失われていく現代人の中に、古代人の呼び声を聴くというのは、かなり難しいのではないか。では、＜柳田民俗学＞で読み解けた時代と＜現代＞をつなぐ時代の間にある「ただならぬ普通」の姿として、どのようなものを考えることができるであろうか。

ここでは、土地に根ざしていた民衆が、戦後、新しい暮らしを求めて流出してきた都会の中で、どのような「ただならぬ普通」の暮らしを創っていったのか、団地文化のコミュニティ形成の姿にそのヒントを考えてみたい<sup>6)</sup>。そこには、伝統的な「農的暮らし」という内発的発展の原型とは違った意味での、都市型の内発的発展を見ることができるのではないだろうか。

原（2012）は、1960（昭和35）年、東京都北多摩郡田無町（現・西東京市）のひばりヶ丘団地に、皇太

子（現天皇）夫妻が訪問した時の記事を紹介し、「公団の団地」に住むことが、当時の都会の人々にとっていかに憧れであったかを示している。しかし、憧れのアメリカ型ライフスタイルの生活も、実際に住み始めてみると、いろいろと問題が生じてくる。たとえば、爆発的に増える子どもに対して保育所が一つもない。こうした現実の生活を、自分たちの手で改善していく必要に迫られた。その結果、食べるための「生存」の必要というレベルから一歩歩みを進めた、「自分たちに必要な生活を自分たちで形にしていくための自治会」が内発的に生まれた。保育所がないならば、自分たちで運営しよう。「団地夫人」となった女性たちは、優雅な「アメリカ型ライフスタイル」ではなく、「家電に取り囲まれた暮らし」で生まれた余暇を使い、自治活動の担い手となり、「守るべき確かな暮らし」を自らの手で切り拓いた（原 2012: 37）。「志」への共感として集まる地域コミュニティの幕開けである（天野 2012: 220）。しかしながら、当時は、そうした活動に熱心になればなるほど、コミュニケーションがうまくいなくなる現実もあった。「自分たちの暮らしやすい生活の実現を切り開く」という思いの共有を土台とするが、思いの深さには温度差もあり、追い詰められる人がでてしまう。「不慣れな自治の時代であった」と天野は言う。「よく生きること」を目指せば目指すほど、コミュニティが閉じてしまう、そんな時代であった（同上: 228）。やがて、公害問題やフェミニズムなど、より社会的なテーマにもとづく運動へと時代はすすむ。

このような戦後の新しい都会型コミュニティを切り拓く担い手として登場したのが、「消費者」として都会の中に住み、そこでの暮らしや社会に問題意識を感じた都市生活者層、とりわけ、サラリーマンの夫を送り出し、地域の中でよりよい暮らし、生き方を模索してきた女性たちであった。こうした都市生活者の姿に、柳田民俗学が大切にする日本人の根源としての農民的な生活者像とは違う、もう一つの、内発的な生活者の姿があるのではないだろうか。そうであるならば、農村型生活者像の姿と都市型生活者の姿と両方を捉えることが、これからの暮らしにおいて、何を大事にすべきかの視点を与えてくれるものとなる。

今日の若者は、ゆるやかな関係性を重んずる世代である。グループの枠を緩くとり、かつての団地的運動

とは全く違う、一つの枠に収まらない不定形のかたちの中で「個」を大切にし、自分にとって大切なつながりを、私的に、個的に求めていく。しかしながら、自由でありながら、確かな柱となる場の拠り所のない世代でもある。こうした世代にとって、自分たちで自治を勝ち取り、社会問題を考えてきた団地文化の生活者の知恵は、知るに値するものではないだろうか。そういう意味での「生き字引」が、戦後新しく開拓された都市の地域の中にはたくさんいる。この点が、柳田とは違った視点で指摘できる地域に内在する価値である。

かつて新興住宅地として開拓された都市の中では、高齢化がすすみ、限界集落地域が生じている。ここをどう活性化するのか大きな課題であるが、現代の都市生活者の高齢者と若者との交流・関わりの実践に、解決の道があるのではないだろうか。

## 5. 地域を場とする生活者教育と域学連携

以上、地域活性化の問題意識のもと、「地元学」を生活者教育の具体的方法としてとりあげ、その現代的価値を認めた上で、「地元」に何を読み解くべきか、柳田民俗学、南方自然学、そして、戦後の団地世代が作ってきた暮らしの歩みから検討してきた。ここまでの考察から指摘されるのは、現代の若者にとって、一つは、「地域のなかにある、昔からある変わらない暮らし」（柳田民俗学）を聞き書きすることを通して、もう一方では、戦後の新しい時代の中で、どう確かな拠り所となる暮らしやコミュニティを作り上げていったのかという団地世代の聞き書きをすることを通して、生き方の指針と社会構想を得ていくことができるのではないかと、ということである。加えて、自然と一体となるような時間空間を、地域の暮らしの中で持つということである（南方的視点）。そうした視点を持ちながら、若い人たちが地域に入ることで、地域の人にも新しい気づきをもたらされ、結果的に地域に活力がでる。地域の中で眠っていた価値に気づき、地元への愛着もわく。そして若者自身も、地域の人から生きるエネルギーや知恵をもらい、生活者としての視点を得ていく。そのような関係性が、大学が立地する「地元」の中でできれば、学生にとってはよい生活者教育ともなり、また、地域の活性化にも結びつく。そして、その経験は、卒業してからも、それぞれの学生に

とっての生き方や仕事の中でのものの見方に生かされていくと考えられる。

試みに、実践女子大学生活科学部が立地する東京都日野市の地域資源をもとに、どのような地域との結びつきが考えられるかの試論を描き、大学と地域連携（域学連携）の意義について考えてみたい。

地元学のフレームワークから、〈土の人〉は日野市民、〈風の人〉が学生である。〈土の人〉の中には、歴史ある日野の地に代々住み、その伝統文化を引き継いで暮らしている人々と、新しく都市住民となって、たまたま日野市に住んで半世紀という人々と、二つの層がある。そして、後者の中には、新住民としてこの土地での暮らし方を内発的に開いてきた人と、都心へと通うサラリーマン生活を勇退して今あらためて〈土の人〉となって、この土地の暮らしを発見したいと思っている人が融合している。いずれにしても、〈土の人〉が享受する地域価値としては、日野市の持つ自然と歴史の地域資源が第一に指摘される。あわせて、都市的な利便性豊かな暮らしも併存するのが日野市の特徴である。

では、〈土の人〉と〈風の人〉の協働の中で、どのような地域活動が考えられるだろうか。

日野市民によって共有されている地域価値の一つは「水と緑のまち」、すなわち自然の豊かさである。そこで、日野の用水・湧水の間を地域資源と定め、〈土の人〉と〈風の人〉と一緒に歩いてみる<sup>7)</sup>。そこには、「先史時代から近世の農村社会までの古層」を重ねることが可能であり（陣内 2012 : 216）、自然とともにあった人々の暮らしの面影と知恵を、目に見える風景の中に重ねることができる。

そうした水辺の風景と呼応して、今に伝えられる昔ばなしを紐解くと、水辺の生き物が村の生活の助けとなって登場する物語が残る。たとえば、うなぎが土地の人たちの水害を防いだという「四谷のうなぎ」のお話が今に伝わり、現在もうなぎを食べない家がある、という<sup>8)</sup>。これほど都市化された暮らしの中に、「古代人」＝自然とともにあって、自然を大事にする伝統の生き方を発見することができるのである。都心へのアクセスもよく、ベッドタウン化し、「新住民」の人たちによって彩られているかに見える、その中をかくぐって、古くからの風習を知る「旧住民」の暮らし、土地の自然を愛し、工夫を重ねて生きてきた人た

ちの姿を垣間見ることができる。それこそが、日本人の心が「つらら状」に残るといふ、伝統の生活価値である。

伝統と自然の「ただならぬ普通」を繙くよすがとなる用水や湧水は、区画整理の中で徐々に減少しているが、まだ農業用の水路として使われ続けている（陣内 2012 : 216）。したがって、この風景を失わないためには、今も残る農地の市民による活用をはかることが大切であろう（市民農園）。そこに学生の力を活用する。それは、環境の時代の生活者となるにふさわしい営みである。

一方、首都圏のベッドタウンとして発達した日野市には、たまたまここに住み、戦後の新しいコミュニティづくりの中で地域での生き方を模索し、生活者として生きてきた現役勇退世代が数多くいる。そういう人たちの中に学生が分け入り、話を聞き、発信をする。普通の生活誌にすぎない話も、若者には興味深く、話者にとっては、「話を聞いてくれる人がいる」ということで張り合いがでる。そのような交流を行う場所を、たとえば地域の中に残る空き家を改造してコミュニティ・カフェとして運営し、そこを発信拠点として、「団地文化を築いてきた人々」の語りをつむぐ。

以上のような活動が具体的に想定されるのは、地区の住民と学生が協働で行うフィールドワークである。それぞれの地域の中にある、その土地ならではの風景の意味やその活用を、地域住民と学生がともに発見していく。自治会組織や地元のための活動を積極的に手がける活動家やNPO、日野市の歴史を研究する市民グループなどの人たち、つまり〈土の人〉に触発されながら、地域の生活価値を知り、この土地で生きてきた人の生活への思いを知ることで、学生たちの「生活者」としての意識も開かれていく。また、〈土の人〉も〈風の人〉である学生からの視点で、地域への愛着を高めることができる。

このように、地域の魅力の発見を、大学の立地する「地元」で実践し、自立した生活者としての生き方の考え方を身につける。そのような「場」や「機会」を、役所との連携、自治会との連携、あるいは、商工会との連携の中に求めていくことで、地域も活性化され、学生にとっても、生活者としての生き方や姿勢を育むことができるのである。それは、市にとっても、新たな地域づくりや住民のつながりを生むきっかけと



なるであろう。

学生の多くにとっては、この地は、生まれとは関係のない「ヨソの土地」である。その土地を「地元」として見ていくのは、あくまでも「ヨソモノ」としてのまなざしになる。しかしながら、その中に「つらら状」に古来の自然と人間の関わり風景と、ニュータウンの暮らしを戦後の時代に開いていった人々の生活意識とを、同時に学ぶことができる。このような活動の結果として、これからの地域活性化の源となるものの見方、考え方、構想力、企画力、実践力が培われていく。地域の自治会の高齢化や機能不全が問題視される昨今であるが、大学生がこうして地域に出て、土地の生活者に出会い、その人生を聞き、自らの人生に活かしていくきっかけとすることは、少子高齢化における地域づくりに資する社会貢献でもある。そして、学生自身にとっても、自分自身の豊かな生活や人生、社会への働きかけ方を習得することができる。これからの生活者教育として、大いに意義あることといえるのではないだろうか。

地域づくりの主体はあくまでも〈土の人〉すなわち、地域住民である。そこに「大学生」が〈風の人〉として協働で地域づくりに加わる。そのときに求められるのは、単に「若者である」という価値だけではなく、「これからの望まれる暮らしの構想を持ち、日常性の中にある目に見えない価値に光をあて引き出すことのできる力、そして、新しい時代の生活技術——たとえば、情報技術や環境技術、暮らしのかたちをデザインし、必要なものをつなぐ力——を持った若者」ということである。したがって、大学の役割としては、これからの暮らしの価値創造の基本的な考え方を問題提起しながら、学生と地域とともにこれからの暮らし像を描く場を持ち、〈風の人〉としての学生の役割に、責任あるかたちで関与していくことである。そして、それを、一時的なものではなく、持続可能な継続性あるかたちでつなげていく。このような人づくりと場づくり、そこに、大学の地域連携の課題は求められることになる。

現在、大学の地域貢献は声高に求められており、地域資源を活かした商品の開発や地域 PR と大学の PR を兼ねる動きが盛んになっている。しかしながら、本稿において考察してきたように地域活性の意味を捉えると、単に経済的な効果の観点での活性化が目指され

べきものではなく、むしろ、地域の社会関係資本の形成に、大学の関与がどれだけ貢献できるか、という観点が重要である。地域を支える生きたコミュニティの形成に寄与できるかどうか、その観点からの発想が、地域活性化のもう一つの手立てとして、大切なのである。

## 6. おわりに

本稿では、現代の暮らしを取り巻く課題の中でも「地域活性化」を大きな課題として取り上げ、そこに寄与できる人材育成の考え方について論考してきた。そこでは、地域に愛着を持つ人材づくりが大切であり、そのための「地元学」の方法は有効であるが、それが表層的なお宝さがしにならないようにするために、何を考えるべきかを論考した結果となった。

本稿の問題意識は、経験主義があまりにも優先して「現場主義」に陥り、本質として戻るところがなくなってしまうにしなければならない、という思いである。現場に入り、具体的な経験をしていく学びは大事だが、活動の意味や方向性を支える理論も大事である。その理論の拠り所を、内発的発展論と生活者論において、考察を行った。

今後の課題は、実際に大学が所在する「地元」に出て、学生と動くことによって経験されることからの検討である。理論と現場と、両方の行き来の中に、地域活性化と大学の役割の位置づけもさらに明確になり、責任ある形での大学—地域連携（域学連携）の恒常的進展もはかられていくことであろう。

## 注

- 1) 本稿で「生活者」とは、生きることの現場である家族や地域の暮らしを基底に、暮らし方、ひいては自分の生き方を意識し、小さくてもよい共同のつながりに自らを開こうとする意志を持つ人をさす。それは、現代の暮らしと社会の課題に対するの関心を持ち、よりよい暮らしづくり、人づくり、社会形成に主体的に働きかけることのできる人である。誰もが、生活者になりうるが、そのためには、現代の暮らしと社会の課題に対して、意識を持つことが必要と考えられる。(天野 2012 i-iii)
- 2) 地域のことは、歩いて、いろいろと経験することの中からしかわからない。同じような問題意識で、民俗学者・赤坂憲雄が東北地方を舞台として取り組み始めたのが「地域学」である。東北の中にも多様な地域性がある

- り、その多様性を捉えるためには「東北」という大きくくりでみてはわからない。もう少し小さい単位で見なければいけないとし、津軽学、盛岡学、村山学、会津学といった小さな地域をフィールドとする地域学が提唱された（赤坂・鶴見 2015: 96）。それでも、実際には単位が大きすぎる。そこで「字」や「大字」レベルで捉える物語が必要という考えに至っている（赤坂・鶴見 2015: 119）
- 3) 持続可能社会とは、丸山（2015）によれば、「私たちが未来世代への責任を担いながら、命をつないでいくことのできる社会」であり、それは「ただ人間の生存が継続されるだけの社会ではなく、人間らしく生きるに値する社会、真に人間的な『豊かな生活』を維持することのできる社会」である。
  - 4) 鶴見和子の内発的発展論から生活者像を検討する試みについては、拙稿参照（須賀由紀子、女性社会とローカリズム～これからの“生活者”像を求めて～、実践女子大学生活科学部紀要 51. 35-46、2014）
  - 5) 南方熊楠は、「南方曼荼羅」と呼ばれる物事の発生図を構想している。近年の新資料により、南方曼荼羅図が描かれた前年（1902年）に、生死が同時に存在する粘菌のライフサイクルを描いた絵に対して、「絵曼荼羅」と言っていたことが明らかになっており、粘菌の生死の状況そのものが曼荼羅であって、それがほかの現象をいろいろ考える上のモデルとなっていたのではないかと現在は解釈されている（松居編 2015: 55、84）
  - 6) この戦後のコミュニティ形成の変遷については、次の文献の論考内容に負うところが大きい。天野正子、ネットワーク型コミュニティを生きる—もう一つの公共圏へ—（天野 2012: 202-252）
  - 7) 法政大学エコ地域デザイン研究所と市民とが協働して、日野市の用水・湧水の実態調査を行い、その魅力を歩いて実感するためのルートマップが作成されている。このマップを使つてのまちあるきが、一つの入り口として考えられる。
  - 8) 日野史談会会員の上野さだ子さんからの聞き書き（2015年8月10日）
- ・小栗有子、「奄美遺産」の地元学的展開の提案、鹿児島大学生涯学習教育センター年報第10号（2013）、1-10
  - ・神谷美恵子、生きがいについて、みすず書房、1980
  - ・小林拓実・中嶋開多、地域活性領域における研究動向分析—「地域活性」概念の誕生と変遷を追って—、地域活性研究 Vol.5（2014）、111-120
  - ・鈴木裕範、地元学の理念と実際～地域づくりのための方法論～、和歌山大学経済理論 350号（2009）、87-106
  - ・陣内秀信・三浦展編、中央線がなかったら見えてくる東京の古層、NTT出版、2012
  - ・鶴見和子、内発的発展論の展開、筑摩書房、1996
  - ・日本建築学会編、未来の景を育てる挑戦—地域づくりと文化的景観の保全—、技報堂出版、2011
  - ・日野市史編さん委員会、日野市史民俗編、東京印書館、1983
  - ・法政大学エコ地域デザイン研究所編、水の都日野、鹿島出版会、2012
  - ・丸山徳次、持続可能社会と里山の環境倫理（村澤他編、里山学講義、見洋書房、2015、25-57）
  - ・松居竜五編、南方熊楠の謎～鶴見和子との対話～、藤原書店、2015
  - ・村澤真保呂・牛尾洋也・宮浦富保編著、里山学講義、見洋書房、2015
  - ・吉本哲郎、地元学をはじめよう、岩波ジュニア新書、2008
  - ・山折哲雄、これを語りて日本人を戦慄せしめよ、新潮社、2014

## 参考文献

- ・赤坂憲雄、鶴見和子、地域からつくる～内発的発展論と東北学～、藤原書店、2015
- ・天野正子、現代「生活者」論、有志舎、2012
- ・井口貢編、観光文化と地元学、古今書院、2011
- ・岩佐礼子、地域力の再発見—内発的発展論からの教育再考—、藤原書店、2015
- ・大住莊四郎、デザイン思考からみた「地元学」、経済系：関東学院大学経済学会研究論集第262集（2015）、1-14
- ・小栗有子、「当事者主権」としての地元学序論、鹿児島大学生涯学習教育センター年報第9号（2012）、8-18